

なにごともなく過ぎる、それは恐ろしの退屈な日々でもあった。日高山中でのことを玉江は思い出した。

春まだ浅い季節の末、寒気が厳しかったが、それでも雪を割って顔を出した川辺の路のとうは、もう、春の誓いことを知らせてくれていた。

ほぼ十年前のこと、表層雪崩が日高山中の山家を襲い、一気に押し潰された住まいの下敷きになって義父の根岸豊吉は死んだ。

いや、玉江が殺した。

すでにあの時、義父は虫の息だった。

手斧ちょうなをふるったことで義父は絶命したのだ。

雪崩は土中深く、殺された男の死体を隠したにすぎない。あの裏山には母のはるの墓もあった。

あれ以来、玉江は東河内の村には帰っていない。幹に五寸釘を打ち込まれたクロガキの樹のことも、思い出した。黒い血の渦が木肌に独特の紋様を作った。

生きたまま釘を打たれた柿の樹は苦しきさのあまりにタニンンを噴き出し、そこにこの世に一つだけの苦しきさの表現をした。

考えてみれば、血の惨劇を生んだのは、クロガキの見事な茶道具がこの世に生み出されてからのことだった。

豊吉が嫉妬に狂ったのは、凶師衆三が弟子入りを願ったからで、図らずも義父は若い男を山家にと引き寄せたのだ。あの、美しい姿かたちのクロガキの茶道具もあの時一緒に土中深くに埋まってしまった。

玉江の毎日は、防空壕のなかで暮らす戦災罹災者

とあまり変ることはなかった。昼間は廃坑の穴から高い空を見上げていた。一筋の飛行雲をたなびかせてB29の編隊が悠然と空を飛んだ。高度一万メートル、敵機を遮るものはなにもなかった。

すでに制空権は奪われ、日増しに本土空襲は苛烈さを加えていた。昭和十九年の夏以降、戦局は日本軍に不利な状態となっていたのである。

六月十五日 アナナ諸島

七月七日 サイパン島

九月十五日 カロリン諸島

九月十五日 グアム島

そして最大の激戦地フィリピン、レイテ島が十月二十一日に、明けて一月九日、ルソン島が遂に陥落しアメリカの手に渡った。

不急の旅行制限。学校工場化による学徒動員体制の強化。学童の集団疎開の実施要綱が発表されたのは神戸では七月八日のこと。十九年の暮れには神風特別攻撃隊が編成され、戦闘機はすべて特攻機となり、肉弾による迎撃戦が実行に移された。

昭和二十年二月二十五日、日本本土を二千六百キロの射程距離内においたB29の編隊が、首都東京に第一回の焼夷弾攻撃をかけた。

続いて、この時期、三月九日から十日にかけて夜間大焼夷弾爆撃が敢行され、東京の大半はこの二回の猛爆で灰塵かいじん<sup>じん</sup>に帰した。

死傷者十二万四千人を数えている。

戦局は大きく傾き日本の劣勢は覆うべくもない状況に追い込まれていくことになる。

ここ氷の山・後山・那岐山を控えた奥深い山間のち地は直接の戦場とはならなかった。中国山地の脊稜部、山また山の地形が幸いしていた。

ひとり、戦いとは無縁の山中に玉江は隠れ住んでいた。しかも人里離れた廃坑の中、さながら世捨人の暮らしぶりであった。食糧を手に入れるために、人の寝静まった

頃を見て玉江は生野の街に足を伸ばした。

目立たぬようにわずかの量だけを手にする。古い白壁の屋敷はその昔、代官たちの移り住んだ建物で、まだこの街には随所に旧幕時代の残影があった。

大方が格子造りの家で、山間の街にしては珍しく大きな屋敷も何軒か点在していた。

食べ物のない時代だからやはり危険をおかさなければ食糧は手に入らなかった。民家や百姓家では手の届く場所に食べ物など置いてはいない。

それにまだ寒い季節、畑の作物も何一つ芽吹いてはいなかった。結局、玉江は鉱業所近くの太盛おおもり山新坑のあたりにまで出かけた。

およそ一時間ばかりも歩く。

ここも江戸の昔、大いに賑わった山で、生野銀山三山師の一人に太盛山を差配した男の名が残されている。いまは太盛新坑通洞となり、昔の坑口は何本ものトロツクのレールをなかに引き込んだ近代的なものとなっていた。

十メートルほどもある高天井には、二十四時間裸電球が灯されていた。

現在も稼動中で昼夜交替の鉱夫たちが詰めている。

次々と搬出されてくる原石は引きも切らない。

機械の稼動する音に、呼子笛、人々の怒号など入り混り、入口あたりは活気を呈していた。

玉江は鉱石運搬車の陰に潜み男たちの様子を窺った。何日か通ううちに、この鉱業所の勤務体制がわかった。二交替制で、夜勤者は夜八時に坑内に入る。

翌朝の八時までの十二時間勤務であった。

昼勤者は朝八時から夜八時まで、いずれも、かなり苛酷な労働時間と思われた。

十五歳以上になって定職につかぬ者は、国家総動員令によって白紙動員された。徴用工たちの大部分は少年か、中年労働者であったが、それぞれに過酷な環境に不満を持ってはいたが、働く場のないこの時代、その分、少しは、賃金は割り増しされていた。

鉱業所本部に近い丘陵の裾野にバラック建ての急造の食堂があつた。玉江は食べ物を手にするために、八時数分前のわずかな時間だけ、この食堂に忍び込んだ。

この時間になると、長い木机の上はその日の食事が並べられた。一杯の井めし、味噌汁・それに、たくわん、ときにはかぼちやの煮付けや、ひじきの煮物、アカエイの煮付けなども出た。

一度に、一つの食堂で三百人ほどの男たちが食事をすする。用意するのは女たちだったが、数人しかいなかった。食卓にその日の献立てが並べられている内に、玉江はすばやく長机の下にもぐり込んだ。

めしの井と菜をとり込む。味噌汁だけはその場でのむ。いつもぬるかつた。犯跡を残さないために一人分だけを持ち出す。食堂の外の竹林の奥に走り込み、素手で井のめしをすくいとして食べた。

すりきり一杯の井めしの中味は大豆入りか、高粱こすりやん、稗ひえ入りで、ひどい時には油を絞つたあとの豆かすが半分ほども混入されていた。

それでも飢えているものには美味であつた。玉江には一日一度だけの食事である。食べ終り、体を小さくしてその場にうずくまっていると耳近くでサイレンが鳴る。

正確そのものであつた。七分後には何百人もの男たちが小さな丘の斜面を登ってきた。どの足音も腹を空かした男たちの気持のままに急ぎ足であつた。

粉塵を頭からかぶつた異相の男たちは、みんな無口であつた。食事時間は十分ほどである。

夜食を腹に詰めた男たちは今度は急におしゃべりになる。脱走者もかなりいたことから、いつも、警護の男たちが監視をしていた。どこへ行くにも戦闘帽をかぶつた何人かが同行していた。その点の、警備の備えも万全であつた。

食事が終り、外に出て来た日本人は、きまつて何人もの男たちが竹林に沿つた道の傍らで立小便をした。吐く息も白い季節だから、白い湯気が沸き起つた。

じゃあじゃあと遠慮もない音がした。

妙に刺激される時間である。男たちの顔は見えなかつたが、とり出されたものの天真爛漫ぶりに玉江はいつも親近感を覚えた。背に明りを受けた男たちは、数メートル先に女が潜んでいるとも知らないで、一日の終りを放尿のあそびで締めくくるのであった。

「な、×××やりたいのオ」

「まだ、おまえ元気が残つとるんやな。女子おなごより戦争や。撃ちてし止まん、あーあ、わいかて、ほんまはやりたいんや」

二人連れの男が正直な告白をした。

が、こんな騒々しさも、数分後には元の静けさに立ちもどる。玉江はあたりに眼をくばりながらそつと竹林を抜け出す。食堂に入り込む。何喰わぬ顔で、食べ散らかされた食卓の上に空になった食器をもどした。

食堂の棟は七つあった。

玉江は目立たぬように毎夜現われては食物を口にしていた。それから宿舎にも夜半足を運び、軒端に干してあった作業衣を何着か盗んだ。

汚れた毛布に、ブリキのバケツ、金槌や釘、それに薪割り用の斧おのも手に入れた。自給自足の暮らしができるように日用品の調達につとめたのである。

だんだん大胆になり、生野駅近くの離れ家のあたりにも足を伸ばした。凶師衆三の伯父夫婦の家をのぞいてみる。玉江が日高山中から逃げ延びて最初に訪ねた家だった。いまは人手に渡ったのか表札の名札は変っていた。それから黒銀谷にある芸者置屋も訪ねてみた。

時節柄、廃業に追い込まれたのか、ひっそりとしていた。行きも帰りも、鉱石搬送路線のトロツコに身を潜ませた。

さながら猿まじらのごとく、夜だけは、のびのびと、玉江はおのれの自由を楽しんだ。

同じ白口の蟹谷旧坑の暗い穴の一つから、一瞬の間ではあつたが、明りがもれたのを玉江は眼にした。

蟹谷は若林坑口の奥にあり、玉江の潜む坑口からは一山越えた位置にある。夜半になると玉江は附近の山々を散策した。暗い闇は彼女の心にとても馴染んだ。

少しも怖いなどとは思わなかった。誰れにも見とがめられることがないので自由を味わった。

檜木山や升形谷の旧坑口跡も探索した。

一つ玉江はすばらしい発見をしていた。白口坑のさらに山深い場所で自然に沸き出る湯泉を見つけ出した。

まだ誰れもその所在は知らないはずだった。

今は無人の領域となっている。

が、坑口の一つから発せられた光は、明らかにそこに人がいるということだった。一瞬、足がすくんだ。

闇の気配なら恐くないのに、そこに人がいるかも知れないと考えただけで玉江は息をのんだのだった。

谷間の地で、すでに光のもれた場所は闇中に沈んでいた。玉江は用心深く岩場の道を踏みしめた。

足晋忍ばせ岩穴に近付く。岩穴は枯れた草で隠されていた。手掘りの露頭窟の一つで入口あたりは、防空壕のように低い天井になっていた。この坑口の中に、昔は、採掘夫たちは這いずりながら、入ったのである。

しばらく入口の岩壁にとりつき中の様子を窺った。何の物音もしない。光ももれては来なかった。

と、張りつめていた空気のしじまを破り、男のすすり泣く声が、どこかの奥所から聞こえてきた。

地の底から送られてくる怨霊の声のように、悄悄とようししようとした響きを伝えてくる。

一匹の幽鬼が、おのれの罪を悔いて、肩ふるわせている様が玉江の脳裡をかすめた。

冷たい風なのに、玉江はその冷たさに気付いていなかった。遠くの山々の峰を渡って一陣の風が寄せていた。

枯れた木々の痩せ細った枝先が、陰々滅々の風音を運んできたのだった。

「うつ、うつ、うつ……」あたりかまわぬ泣き声になった。肩打ちふるわせている一人の男の姿が玉江の臉に映し出された。玉江がそつと歩をすすめた時、足場から石くれが一つ落ちた。

人の気配を感じたのか、泣き声がぴたつと止んだ。こんな山中の、しかも誰れも近付かない廃坑の中に、自分以外の人間が住んでいるなんて……。玉江には信じられないことだった。ほんとうに生きている人間なのだろうか？

まだ、信じられないでいた。  
が、玉江は構わず、横穴にと一步を踏み出した。

人の声であることを確信した。人恋しさの気持も多分にあつた。闇中なら相手より余程、敏捷に動ける自信があつた。横穴は二メートルほど入ると行き止まりの壁があり、そこからほぼ九十度角で左に折れていた。

匍匐ほふく前進をしたその先は入口あたりよりやや天井が高くなっている。横幅も少し広くなった。

やつと人が一人か二人通れるぐらいの坑道であつた。坑道は西側にいくつかの待避穴があつた。

岩壁を刮りぬいたものである。  
闇の向こうに、はつきりと人の気配を感じとつた。

いきなり襲われてはと思ひ、低い声で誰何すいかした。「ね、だれかおるん？」返事はなかつた。

一步もすすめずに玉江は息を詰めた。  
重苦しい沈黙の時間が続く。

玉江は闇の向うを見極めようとして、じつと耳目をそばだたせた。もう一度、声を掛けようとした時、すぐ近くから歌声が発せられた。

敵は幾万ありとても すべて烏合(うご)つ(ご)うの勢なるぞ 烏合の勢にあらざとも 味方に正しき道理あり 邪はそれ正に勝ち難く 直は曲にぞ勝栗の堅き心の一徹は 石に矢の立つためしあり 石に矢の立つためしあり などで恐るることやある などでたゆとう(た)う(と)やある

風に閃く連隊旗　しるしは昇る朝日子よ　旗は飛び来る　弾丸に破るる程こそ誉なれ　身は日の本のつわものよ…

はじめは蚊の鳴くような細声であった。

おつかなびつくりの口唱だった。

歌声を発しながら相手の様子を窺っている。時折り、歌は調子外れになった。男は空元気が明らかなのに勇を鼓するためか音節を高めてみせた。

歌声がとだえたと思つたら、また男は鼻をすすり上げ泣き声になった。

「うちは怪しいものとはちやうよ。な、安心してええんやで、ここには、あんたとうちしかおらん。え、そうやろ…」

男の潜んでいる岩穴はもうわかっていた。女の声に安心したのか、はじめて男の声が返ってきた。

「あんただれや？　ぼくを捕まえに来たんやないやろな」

「あほな」といわんとき。どこのだれかわからんに、なんで捕まえたりするのん」

「ほな、こちへ来い」

一、二、三步、玉江が奥へと歩をすすめた時、いきなりトーチランプの明りが向けられた。同時にうずくまっている男の姿が明りの向うに浮き上った。

「あかんで！　はよ明りを消し、その明りを見てうちはここへ来たんや。それがいちばん危険やわ」

慌てて、男が明りを消した。

元の暗闇になったが、玉江が男に手を差し出した。

男の汗の匂いがした。

玉江は引き寄せるようにし、男の肩を抱きとつた。まだ震えている。それだけではない。

緊張が解けぬのか、男は鼻先で「ふふふふ」と奇妙な声を出し、玉江にしがみついていた。

どこか幼い感じがした。兵隊服に身を固めていたが、肩などは女のように撫で肩であった。

「あんた、兵隊はんか？」

「…ちがう、そんなもんとはちがう」

男は、急に強い口調で否定した。

「そんな（どうちには）どうでもええのや。うちも穴ぐら暮らし、あんたとは同じ穴のむじなや、仲よろしよ」

玉江は姉さま女房のような口をきいた。

「ぼくはな……」

「ええのんや、何も言わんかてええ、一人ともなんかあるからこんな穴ん中に隠れてるのんやんか」

男の足元はどこか覚束おぼつかなかった。

よろよろと歩き、何度も岩の道に足をとられた。

これで四日もそのまま食わずの日々を過ごしてきたのだという。玉江はこの男を、自分が潜む白口坑の地底の暗所に連れて行く。

この日から、なにかいわくあり気な男との共同生活が始まることになった。

### 3

非常食の乾パンの貯えが少しあった。

男は呑み込むようにして食物を腹に入れた。ふつふつと息声をもらして食べるのがこの男の癖であった。

一匹の犬を飼っているような気に玉江はさせられた。

「ぼ、ぼくは、もう……死、死のうと思つて、こゝへ来たんや」

やっと人心地ついた時、男は訊きもしないのに身上話を始めた。安心したらしい。

名前は一ノ瀬圭吾、二十二歳の若者であった。

姫路の連隊に三か月前に入営した新兵でいま教化訓練中の身であった。軍隊生活の辛さに彼は十日前に脱走した。休暇でたった一人の姉の家行く途中、この生野銀山の廢坑の一つにもぐり込んだのだった。

帰營を拒否したものの辿るべき運命は悲惨なものであった。すでに脱走兵に対して憲兵が徹底捜査に乗り出しているにちがひなかった。

徴兵忌避者と脱走兵、非国民の最たるもので官憲に対する公然の挑戦者として彼らは血祭りにあげられた。これは戦後に明らかにされたことだが、キリスト教の信者であった某は、召集入営のち銃を上官に返し、「わたしは人殺しはできません」と兵役拒否の申告をし、軍事法廷で二年の懲役判決を受けた。

が、その後、終戦までの七年間、陸軍刑務所をたらい回しにされ、敗戦によって出所した時は骨と皮、数日遅れていたら衰弱死しているところだった。

「もう二度とぼくはあそこには行かへん。あそこにおいても殺されてしまうのや。古年兵にいじめられて、ぼくの知つてる男は首を吊つて死んでもうた。その人な、左足の親指がないのや。それで行軍の時、歩けんようになって、みんなに背負われて帰営したのや。ぼくら、みんな第二国民兵で丙種、徴兵検査ではみんな一度は、はねられたのや。それがこのご時勢や、指がなくても足がなくても、耳が聞こえんでも応召や、古年兵がな、おもちゃの兵隊や言うて、いじめ抜きよつた。こんな、あほな戦争であらへん」

古毛布をあてがわれた一ノ瀬圭吾は、背を丸めている。いつか、あの、ふつふつと鼻をならす癖は、見せなくなつていた。

「一人やと、ここにるのが恐かつたのや。今日こそ死のう、今日こそ死のう思うて。意気地のない話や。死にきれんで、今日まで穴の中でじつとしてた。こんなん、死んでると同じことやのにな」

ことばが跡切れる、その瞬間の沈黙が恐いかのように彼はよくしゃべつた。ちよつとボーイソプラノ調の高い声で、興奮しているのがよくわかつた。

「うち、寒うなつたわ。あんたと同じ毛布に入れて。抱き合つて寝たら、ぬくうたるよつてにな」

玉江には男が可愛い少年のように思えた。

ぎこちない感じで二人は向き合っていた。玉江はかまわず体をすり寄せて行き一つ毛布の中で肩を並べた。

「あ、あの、ぼく…もうぬくうなつたからええです」

急に他人行儀のしゃべり口になった。一ノ瀬圭吾は肩から毛布をとり、玉江の背に掛けた。

「ええんやつたら。ええの、体のぬくみが伝わって二人でいるほうがぬくうなるのや」

「……………」

一つ毛布で男の体を包んでやり、玉江はかたわらに引き寄せた。緊張しているのがよくわかった。

そつと玉江が腿の上に手を置くと、びくつと体をふるわせた。押し黙り、男は体を硬くしている。

背に回した指で、短髪の耳のあたりに触れてやったら、ぎくしゃくした感じで急に顔を左右に振った。

「ぐくりと一つ生睡をのむ。

ふつふつと、また息声をもらす。

「あのな、うちとあんた、こんなところで会つたのもこれは何かの縁やで。うちかて、どえらいことをしてしもつて、

ここに身を隠してる女や。二度と世の中には出られへんのだ。あんたかて同じことや。仲ようするのが、一番ええのとちやう？明日な、明るうなつたら二人だけで結婚しよう。うちら男と女や、夫婦になつてもええのやで」

「そ、そんなこと…ぼ、ぼくはいつ捕まるやも知れん。いまかてまだ死にたい気はあるのや。そんなむりな話や。

結婚なんて、でけるわけがない…」

「あほやな、この世の中にな、取り残されたつた一組の男と女やんか、みんな戦争に行つて男は死んでしもうた。そう思うたらあんたは男の中の男や。そう思うたら、こわいもんなんかなんもあらへんぞ」

「そんな夢みたいなこと…どうせもうじきな、憲兵が来て御用や、草の根分けてもな、あいつら探しよる。きのうも嫌な夢みたんや。狸みたいに煙でいぶり出されて穴から這い出たら狙い撃ちや。銃を構えた兵隊がぎょうさん並んどつた。ぼくの体は蜂の巣や。胸のあたりが痛うなつて眼が醒めた…」

まだ夢の続きを見ているのか、そう言つと急に一ノ瀬

圭吾は体を打ちふるわせた。

玉江にしがみついて来た。

「うーっうーっ」と声をあげ、またむせび泣きを始めた。「よしやよしや。あんた兵隊はんがよっぽど辛かったんや。うちがついてるよつて安心しい。なあ今夜からぐっすり眠れるで。あんた、頭も体も休めんとあかん、疲れてるのや」玉江はやさしく抱きとつてやり、頬を寄せてやる。

膝枕をして男を寝せた。母親の膝の上にあるように、一ノ瀬圭吾は安心してか、すーすーと軽い寝息をたてて眠りに落ちた。

#### 4

第二国民兵人々は、寄せ集めのこの兵隊たちを見立て、日本の負ける日を予感した。

一億皆兵の掛声のもと、兵役に服せるものはみんな戦場に狩り出された。一ノ瀬圭吾は二年前、徴兵検査の結果、即日帰郷者の命を受けた。陸軍中佐の老いた男が不合格者を前に訓辞を垂れた。

「……いま不幸にして皇国の神兵となれずにここを去る者は、不具、胸部疾患、強度の性病、それに精神病の患者だけである……」

本来なら三種だったが、戦いたけなわの頃で第二乙種に繰り上げられ、一年に二度、簡閲かんえつと点呼の名のもとに在郷軍人会の男たちに戦局の重大さを説かれ、明日にも召集令状の赤紙が来る身であること、を申し渡された。

一ノ瀬圭吾は子供の頃、父母を亡くし、姉と二人、遠い親戚の家で育てられた。

丹波・氷上の檜皮師ひわだしに尋常小学校を出た年に奉公にやられた。

その時、姉のよし子とは離れ離れになった。

昔から丹波の氷上・多紀の地は檜皮師の里で、またこの地は檜ひのきの産地としても知られていた。

檜皮師というのは宮大工職で屋根を葺く職人のことを言った。樹齢五十年から六十年の檜の皮を剥ぎ、これを二・五尺 約七十五センチの大きさに寸を揃え、皮拵（こしら）えしてから、神社や仏閣の屋根を葺く。一年中、日本のあちらこちらに出かけて行くので圭吾はほとんど、氷上には帰ることがなかった。

独特の道具を使うので鍛冶職の腕も必要とされる。ふいごで火を起し、鉄を打った。修業はきびしいもので、特に神の社を預るのだから精進潔斎（じやうじんけつさい）を求められた。

格式の高いお社では屋根を履くのは白い衣に身を包んで作業をした。

檜皮屋根の美しさは曲線にある。曲がりの部分を見事に仕上げるのが職人の腕で、この美しさの表現が、檜皮屋根のいのもであった。

四、五年の弟子奉公をして、やっと、一人立ちするこゝとができる。親方から仕事がもらえるようになり、仕事に自信がもてるようになった矢先に、彼は梯子から落ち、地上に叩きつけられた。

ちょうど、徴兵検査を受ける前のことで、二か月病院生活をした。したたか脊椎を打ち、この時の怪我が原因で、のちに神経障害が残った。

徴兵検査は不合格になった。

お陰では彼は徴兵のがれのために一芝居打ったというようなことを言われた。誰れが立てた噂なのか、一度ならず地区の憲兵に呼ばれて問責を受けた。

事実は隠されていたが、数々の徴兵忌避事件があった。兵隊にとられないために手斧（てあ）ちようなどで右手の人差し指を切断した男もいた。銃の引き金がこれだと操作できないのだった。

崖から飛び降り、両脚を骨折した者もいた。

徴兵検査前に食を断ち、痩せ細って病人を装った者、石で脛（すね）を砕き、自ら歩行困難者となった者、あるいは精神病者になりすまし奇行を重ねた者など、

多くの徴兵忌避者がこの時代にはいたのだった。

あらぬ疑いをかけられたのは、まだ当時は神経障害が目立つほどの症状ではなかったからである。

手指の震えに加えて、わずかに眼球の《振むんぞう》が見られただけだったので、他人には健康体の男に見られたのである。

だが南方戦線が破局を迎えたことで、壮年男子の数が減ってしまった。

第二乙種の男たちにも召集がかかり、一ノ瀬圭吾も入営した。この頃から彼の病状は悪化した。

起床ラッパに叩き起されても容易に頭が上らなかった。痺れが頭にあり、急に起きるとめまいがして倒れた。

やつと起き、軍服のボタンをはめる段階になってまた遅れをとった。手指の先が震え、うまくボタン穴を探りあてられなかった。宮庭で整列する際にも一人遅れた。

古年次兵が、このろまな初年兵を見のがすはずはなく、第七班は、この、へまばかりをやる兵のために、いつも全体責任の科（とが）で、全員がビンタを喰った。

うまくやろうと思えば思うほど、動作がちぐはぐになり、彼は失敗ばかりを繰り返した。

挙手をし、敬礼するとぶるぶると顔面が左右に震えた。眼球振とう症であった。

一人だけいやでも目立った。

「きさまあ！」

班付けの上等兵がすつ飛んできて彼を張り飛ばした。何度やつても同じことだった。

足手まといの兵を抱えたことでこの上等兵は彼を目の敵にした。上官の指示で、やつとのこと、一ノ瀬二等兵は隣接地の陸軍病院に送られた。

精神病棟で菅原二等兵と知り合った。

部隊はちがっていたが、すでに原隊は中支方面に出発し菅原二等兵は原隊離脱の身であった。片足の指が親指を除いてなかった。この男も徴兵忌避者のそしりを受けていた。実際に、足の上に重量物を落し、彼は障

害者になったのであった。いわくつきの入隊だから、彼は要注意人物として徹底的にしごかれたのだ。

二週間も病院生活していると、嘘のように病状が軽くなった。ある日、隣りのベッドの菅原二等兵が、まるで独り言みたいにぼそぼそと呟いた。

「あなたの病気は治らんほうがええ。気が狂った真似してたらな、ほんまに気違いになれる。これは戦争病やからな、戦争が終ったら、わいの勝ちや」

菅原二等兵の日課は首吊りのまねをしてみんなを笑わせることから始まる。それは死刑台の絞首刑を真似たものだった。どこかの外国映画の一シーンを思わせる十三階段を上る仕種で、名優チャップリンでも、こうはいくまいと思われる演技力だった。

圧巻は、宙吊りにされる寸前に発する「天皇陛下万歳！」の叫びで、この茶化し半分のゼスチャーは、不敬の罪に相当するほどのふざけたものだった。

入院した最初の日、一ノ瀬圭吾は、あまりのおかしさに、つい、笑ってしまった。が、彼も二日目からは笑わなくなつた。笑う人間は正常なのだつた。

ちゃんと密告屋の男がいて、すべて入院患者の一挙手一投足は監視されていたのだつた。それで、疑心暗鬼になつて、彼は菅原二等兵すら疑つた。他の男が正常者を見分ける法について知恵を授けてくれた。菅原二等兵のゼスチャーゲームは一種の踏絵代りになつている。一となる。彼は馬鹿げたゲームを楽しみながら、同室の者を観察していたのだろうか。

どこまで狂っているのか、いや、正常なのか、彼には見当はつかなかつた。

教化訓練は三カ月目に入つており、彼の原隊は問もなく外地に出発することになつていた

元々、兵役不適の者たちを集めた第二国民兵の徴集者ばかり、一ノ瀬二等兵もその員数に加えられた。軍医が退院許可の書類に判を押した。

原隊に復帰したら、連日のシゴキが待つていた。

とたんに眼球振しう症の症状が表に出た。めまい感覚があり、緊張すると足元までがぐらぐらと揺れた。平衡感覚が失われ、立っていられなくなる。

内耳にある二半規管、眼で見る外界状況、それに  
大脳、小脳、脊髄などの神経系統の三つの連絡によつて人間の平衡感覚は保たれている。

彼の場合は、脊髄の損傷による神経症だったのだが、誰れも、彼の苦しみを理解してはくれなかった。

そんなある日、兵舎につながった一郭の便所で、一人の男が首を吊つて死んだ。

菅原二等兵は自ら申し出、原隊復帰を願つた。

別の部隊に配属されたのだが、まともになつた菅原二等兵はこれ見よがしに、外地出発を前にして縊死して果てたのだつた。

どこまでが本気で、どこまでが狂気だったのか？

一ノ瀬二等兵はその心根を凶りかねた。

死の場所に立ち会いながら彼は菅原二等兵を救けることができなかったのだ。

神経性下痢でその夜、彼は何度も便所に足を運んだ。足音忍ばせて、誰れかがやって来た。

擦り足で、どこか幽霊の足取りを連想させた。

暗い一隅のこの便所の建物にはそれらしき怪談話  
がまことしやかに伝わっていた。便所の壁に人の顔が浮いて出たり、睨すすりり泣きの声がどこからともなく聞えてくるという。

格子窓の外を見れば重装備の行軍の兵士がとぼとぼと、歩いているなどという話もあった。

なにか背筋が冷たくなり、居たたまれない思いで彼は立ち上つた。暗い裸電球が高い天井に一つだけ灯つている。出ようと思ひ、鍵のかからぬ扉を、そおくと外に開いたら一人の男が便所入口の鴨居の前に立っていた。  
足が疎んで彼は一步も動けなかった。

不動金縛りにあつていた。

黒い影だけの男はひよいとゲートルを鴨居の上に投げ

た。その男が菅原二等兵だとわかったのは、あの首吊りのお芝居を一通りやってみせたからだつた。

なかなかには前にすすまない足を、両手で抱え、むりやりに次の一步をすすめる。

もう、彼は笑えなかつた。

眼の前には丸い首吊りの輪が垂れ下つていたのだ。

一ノ瀬二等兵はゼスチャーゲームを止めさせる機会を窺っていたが、足が一步も前にすすまなかつた。

ほんとうに菅原二等兵は狂っているように見えた。

うつすらと口元には笑いさえ浮かべているように見える。妙な仕種を重ね、遊泳している様はむしろ楽しそうでさえあつた。ゼスチャーゲームの手順はまったく同じであつた。彼には首を吊るその瞬間のタイミングまでわかつていた。首にゲートルの輪を掛けた。

一っだけ手順が狂っていた。「天皇陛下万歳！」とは言わなかつた。あつと思つた瞬間、菅原二等兵の体は宙にぶら下つていた。踏台が強く蹴られていた。

どうやってそこを抜け出たのかは、彼は覚えていない。

便所の入口で首を吊つたのだから、きつと、ぶら下つた菅原二等兵の体を押しの外に飛び出したにちがひなかつた。彼は兵舎にもどり、ただ、おそろしさにぶるぶると震えていた。

騒ぎが起り、当直の士官たちが、あわただしく便所につながる渡り廊下を走つて行くのが見えたが、彼は目撃者の立場を知られまいと口を嚙つぐんだ。

関わりになるとまたおもちやの兵隊にされる。

じつと、死んだように寢床の中でうずくまっているのが最良の策であつた。

菅原二等兵が転属させられた部隊は広島の宇品（うじな）の港から、数日後には外地に出発することになった。一ノ瀬二等兵は外地配属を前に二日の休暇を与えられた。たつた一人の姉よし子に一目遇うために嫁ぎ先の和田山の農家を訪ねることにした。

もう五年も会っていないなかつた。それに外地に配属され

れば、姉とは生死を分つことになるかも知れないのだつた。この世でたった一人、血の通い合った姉である。

和田山は播但線生野から四つ目の駅で、冬は深い雪に閉ざされてしまふ僻地であった。

あいにくの大雪で除雪車が出ていたが、運転は休止された。元は姉は生野に住んだ。

五年前に会つた時は姉の夫はこの鉾山の選鉾夫をやつていた。体をこわして和田山の実家に帰つたのである。この大雪による足止めが、一ノ瀬圭吾の運命を変えた。病状がよくなる見込みはなかつた。

仮病扱いされたことで、古年次兵のいじめぶりも度を越したものになった。近頃では緊張すると、忌避本能が働き、気を失つて倒れた。すぐ気が付くのだが、ふつんと神経の糸が切れるみたいに瞬間に記憶を失つたりした。それでも彼は五体満足な兵だつた。

強度の近眼で、銃の照準も決まらない兵や、指のない兵、もう、四十になろうという齡の足の不自由な男もいた。生野銀山の廃坑のことは、姉の夫になる男から話を聞かされたことがある。

ふらふらと足は山の方角に向いた。脱走する―そんな確固たる信念があつたわけでもない。

嫌な古年次兵たちの顔が思い浮かんだだけである。一人の精神病者が、だれもいない暗い闇に引き寄せられた。そう思わせるほどのどこか頼りない脱走行だつた。

春の陽光がもはや訪れたかに思われた。重く垂れていた灰色の雲が払われて、この日は二日月も半ばかり思わせるほどの暖かさになった。

はじめて、玉江は男の顔を明るさの下で見た。

まだ幼い顔で少年兵のように見える。背はあまり高くなかつたが、撫で肩の割には肩幅は広がつた。軍服を脱がせ、手に入れておいた古い作業衣に着変えさせる

。スフ地の草色の作業衣を着ると気の弱そうな男になった。この男の妙な息声の原因が何であるか、一眼、顔を見た時わかった。眼球が飛び出すのではないかと思わせるほどに、両眼を大きく見開いていた。視線を合わせると、あわてて眼を伏せた。息声を発し、妙な具合に全身をねじった。「気にせんとき、うちと一緒にいたらそんなん治るからな。さあ、そんなことより今日はうちとあんたの結婚式やで」

昨夜、一つ毛布に寝た時から、はじめて体を合わせる時のことが思われて久し振りに玉江は興奮した。男の汗臭い匂いに体が疼うずいたのだった。

「お陽様にも当らんとな、青びようたんになるわ。誰れも来(こ)ん、ええ場所知ってるから一緒にき。二人のな、思い出の場所にしよ」

やつと玉江は怖気おじづく圭吾を表に連れ出したのだった。山の地形を複雑にしているのは密窟跡が各所に残っているからであった。

お上の眼をかすめて銀を手に入れようとした不届者が江戸時代には横行していたのだった。玉江はその密窟跡のある深い谷を目指した。

あやうい感じの二枚岩がちよつと不自然な恰好で岩壁の上に乗っている。陰陽石のような思わせぶりな亀裂があつて、その窪地の下に密窟道が続いている。長い距離ではない。山の中腹に穿たれたトンネル道のよくなものだった。もつとも坑道そのものは狭く、四つん這いにならないと通れない。単純な横穴だから岩盤質の抜け穴は今でも危険ではなかった。

それでも手掘りであったことを考えれば三十メートルの長さは相当な労力を要したことになる。この秘密めいた抜け穴のお陰で、目指す場所はうんと近道になった。山の谷沿いにさらに奥を目指す。

岩清水が湧出した小さな川があった。

玉江は一人川原に下り、足跡を砂地に残さぬように気を付けながら、小石の陰に隠れている沢力二

を何匹も捕まえた。口の中に含み、噛み砕く。腹を空かしている二人にとっては美味な朝食だった。

「このあたりは蟹谷と呼ばれる。蟹を見つけることのできる谷だからそんな名がついたのかどうか、三百年ほど昔には大いに賑わった山の一つだったが今は完全に廃山になっている。」

残雪が、谷の道にはある。

まだ空気は冷たかったが、歩いたことで二人とも汗が噴き出した。

「もう、このあたりの雪解けもすぐや。うち、この陽気で汗ばんでしもうた」

上衣を玉江が脱ぐ。

だが圭吾は途中でへたり込んでしまった。谷坂の途中で腰をおろし、肩で息をしていた。

すでに二時間は歩いていた。

玉江も隣りに坐る。眼下の谷川を見る。

山間を縫って流れる溪流は市川に連なっている。生野の街を貫き、流れはそのまま下って姫路市内を縦断する。行き着く先は瀬戸内の海であった。

「さあ、もうちよつとや。あつたかーいお風呂に入れるんや。うちがきれいに洗ってあげる」

「結婚式するというのは…」

「そうや、一緒に暮らして行くんやからお互いが助け合って行くいうことや。なあ、あんた、まだ女の人の体のこと知らんのん？」

「……ぼぼ…」

「大丈夫や、こわいことなんかあらへん。うちがな、なんもかもちやんとしてあげるよつてにな」

「……」

「さ、行(ゆ)こ、お風呂の湯加減もええで。ふふふ」  
すつかり玉江は陽気になっていた。

「ほら、あそこや」

小一時間ばかり低木林を分けた時、玉江が前方を指さす。裸岩が崖状になって突出していた。

下から見ると、その上に湧泉があるなどということはいわからない。ただ雪は払われていてやや赤褐色の岩が露頭していた。巖頭の際には杉の大樹が一本立っていた。崖場を登った。三十度角の急な道は足場がなく先に登った玉江が圭吾の手を引いた。湯泉は洞穴状になつていて白い湯気が立ち昇っていた。

庇ひさしめのように岩天井がせり出している。

小さな水溜りを思わせる湯量であつた。岩に囲まれた窪地で、人が二人入れるほどの浅い湯泉である。

「山の温泉や、これはうちが発見したんや。土地の人かて絶対に知らへん。このあたりにはどこにも温泉あらへんもの。うちが育つた日高には神鍋かんなんにお湯が出たところがあつたんや。同じ中国山脈、続きやもん、温泉があつてもちつとも不思議やないで」

この温泉場にはもう一つ不思議な情景があつた。

この湯泉を覗き込むような恰好で、杉の大樹の梢が岩陰に沿つて顔を覗かせていた。

ちよつど地上と、高みの場所にある杉の樹の梢がほぼ等位置の高さとなるのだつた。

「あれはな、サルオガセというてな、樹にとりつく苔（こけ）みたいな植物なのや。よう見いい」

圭吾はそのお化けのような杉の樹の梢に眼を奪われた。枝を広げた杉の梢はまるで枯れた木のように思われた。枝は地衣類のサルオガセにからみつかれており、まるで蜘蛛の巣が張つたようになつていた。

「杉の樹はな、木の精を吸われて枯れてしまうのや。うちが女やけど、男はんに血吸われて死んでもええと思つてるのや。昔のことやけどな、うちにもそういう男性がおつたのや。体中にとりついてな、ああやつてサルオガセは、あそこを墓場にしてしまうのや」

圭吾には玉江の言っていることのすべてがわかつていたのではない。ただ、見るから無気味な光景だつた。

淡黄色のひげのような植物が杉の梢にとりついた様は、だらりと手を垂れた死人の手そのものであつた。

何千、何万匹もの蜘蛛が、杉の梢をねばつこい糸でからめてしまったようにも見えた。

が、足元にわき出ている熱泉は、木洩れ陽にきらきらと光っている。これまた別世界の光景であった。

ぽこぽこ岩穴の奥のほうで湯の湧き出る音がしている。耳を澄ますと、どこかの梢を渡るのか、ちちちちつと鳴く小鳥の囀り声が聞えた。きのうまで考えもしなかった世界が、一ノ瀬圭吾には用意されていた。

6

「ええか、一緒にお湯につかってな、それで、きれいになるのや。疲れもとれるしな」

すでに玉江はモンペの結び紐を外していた。圭吾は急に真顔になり強く頭を振った。これから何が始まるのか、まだ彼は決心がついていなかったのだ。

「あほやな、お風呂に入る時はみな裸やろ。うちら男と女はな、抱き合うことしか残されてへんでえ。そやろ、なんの楽しみがあるん？裸になつても誰れも見えてへんし、誰れも文句は言わへんで。二人とも生れたままの丸裸になろ」

玉江の丸い肩が剥き出しになっている。圭吾はその後、呆然とした面持ちで立っていた。

手際よく、何のためらいもなく、玉江は次々に着衣を捨てていった。ひよいと後ろを振りむき、

「はよし、女の人だけに先に脱がせて卑怯やわ」

と、ちよつと照れもまじえて圭吾にも裸になることをすすめた。「そやかて…」圭吾は眼のやり場に困った。

白い上半身が剥き出しになりちらと乳房の裾野のふくらみが見えた。玉江の姿態は大胆そのものだった。

モンペの腰に手が掛かり、一気に下着ごと下におろす。丸くて大きな腰があらわれ、双つの尻の豊かな張りが眼に止まる。切れ込んだ内腿の肉の白さに思わず圭吾は眼を外らせた。圭吾はまだ女の体は知らない。

「な、はよし！」

今度は怒った調子になっていた。後ろ向きのまま、その命じ、そのままに、湯泉に一步をすすめた。

外の冷気との温度差で、湯の表面には白いもやが、立ち昇っていた。「あ、ぬくう」と玉江が言い、湯面を叩いた。ぱちゅぱちゅと湯音がした。

それほど深い湯場ではない。一メートル四方ほどあり、やや縦長で、しいていえば瓢箪型をしていた。

そのふくべの大きな円の部分に玉江は腰を沈めた。向きを変え、圭吾とは正面向きになる。

いやでも彼の眼には湯を使っている女の裸身が見えた。豊かな肉付きと白い肌、もつとも刺激的だったのは三角地帯の黒い叢林の揺れだった。

玉江はわざと立膝したので、せいぜい腰の下辺までしかない湯ではとても隠し切れなかった。

「はよし！あんたの裸かて見せて欲しいのや」  
促されてやつと圭吾は着衣を脱ぎ始めた。

後ろ向きだったが女の視線が刺さっていると思うと動作がぎこちなかった。ふと変なことを彼は考えた。

まだ自分のおかれている境遇が信じられないのだった。湯浴みをしている女は……ふり向けば鬼面を持った女が自分を見つめているのかも知れなかった。

そのくせ、もう圭吾の胸は高鳴っていた。  
女体に対する強い憧れがなかったわけではない。

彼だつて二十二歳の若者だった。  
やつと裸になったが、木綿のふんどしだけは取らなかった。照れた笑いを浮かべ、ぎこちなく体を折って湯面に足を浸した。人肌よりやや熱いぐらいの湯で、鉱泉湯なのか、わずかに赤い藻のような湯垢が浮いて出た。

まるで女のような仕種で、はずかしそうに圭吾は湯の中に身を浸した。下腹部は両手で隠してもいた。

「ややな、生れたままの丸裸というたやろ。な、ああ、そないに、はずかしいんか」

玉江の手が伸び布切れの下に指が入ってきた。指はふんどしの下の腿の付け根に沿ってやさしく上下した

。それから陰毛のそよぎに伸び、梳ぐしけずるようにそそーと指先にからませた。さらに手指は中心部に伸びて、男のものを探った。指でつかみとられ半ば勃起した先端部の包皮を、ゆつくりと剥かれた。

もう一方の手で下着の紐を解かれる。外されていた。玉江の右手指は、剥き出しにされた圭吾の赤しるしを支え持っていた。

「な、凄いと、気持がええのや。ほかにこれ以上ええもんはあらへんよ。うちはほん食へんかて我慢でけるけど、男はんこのことがなかつたら頭が変になるのや」

きれいにするために玉江は手指で軽くしごく。と、急にまた圭吾は「ふっふっふ」と息声を発し始め、顔中を苦しそうに右左に震わせた。湯面に露頭したものを口中に含み、玉江は巧みに舌をあそぼせる。男が苦しうにするのに、玉江はかまわず吸った。

圭吾が玉江の後頭部を上から押さえつけた。「うっ…」とたんに圭吾は放っていた。その瞬間口を離れたので白濁した体液は勢いよく湯面に飛び散った。

「まだな、これからや。これからが夫婦の契りやで」玉江は、初めての男なら挿入したとたんに放つてしまうと考えたのだった。どうせ、慣れない男だから愛撫で狂わせてくれるとも思えなかった。

長持ちさせるためのこれは所作だった。それで玉江は、童貞の男の眼の前で狂態を演じてみせた。自分が昂たかまるために。

「あんた、女のひとの見たことないんやろ。よう見い、うちが教えたげるからな。ここんところはな…」

どうしていいものか、圭吾は眼の上の開かれたものに、眼を据えたまま体を硬くしていた。

玉江は湯の中に両足を入れたまま、坐り込んでいる圭吾の鼻の先に下半身を押し付けた。黒い飾り毛に隈取られた下辺に、裂口部があった。

よくはわからないが複雑な感じの合わせ目で、とても神秘的な造形であった。

「いかな…」

玉江は露出狂になることで昂まることを考えた。指を添え、花びらを押し開く。開口部のありかが示される。赤味を帯びていた。

ちゃんと指を一本挿入してみせ、その時の処法を示した。玉江は前戯の代りに自慰の行為を行なっていたのだ。それから男の手をとり、指を導く。縫合部の小ささ肉の突起にも手指を添えさせた。

愛撫を求めたら、ただ、強く指が動いた。痛かった。やさしく導いてやると、男は発作を示さなくなった。湯につかつたまま二人は抱き合う。まだ坐つたままだった。男には乳房がいちばんいい愛の玩具になった。

赤ん坊のようにちゅうちゅうと音を立てて吸った。丸い肩を抱き、唇を合わせてきた。

玉江は少年をやさしく抱き取っている気になった。もう、圭吾はあの、「死の世界」を思わせるサルオガセの鬱蒼とした暗さを見ていなかった。

ただ、ひたむきに女体に武者振りについて行った。玉江はもつとも刺激的なポーズで受け入れてやる。湯泉の中で四つん這いになり、高く腰だけを掲げてみせた。後背位の姿勢を取った。腿の中程あたりまで湯量があった。伏せた顔すれすれに湯面があった。

初めての男は言われた通りに、夫婦の契りの行為に励んだ。熱くなった先端部が何度か逃げた。玉江が自分の下腹から手を伸ばし男のものを誘導してやつてやつとおさまった。

「ええよ。そのまま突いてえ」

圭吾は玉江の腰を両手で抱え込み、一気に深く突いて来た。「うっ！うんっ……」腰が崩折れそうになってきた。凄い結合感に膣道に熱覚が生じた。

圭吾が腰を前後に動かす度にぴちゃぴちゃと湯面が打たれて連続音を発した。

その湯音のピッチが上るにつれて、腰を支えているのが辛くなった。途中で圭吾は二度目を放つてしまう。

まだ、玉江は体を離すことを許さなかった。

子宮の奥に収縮感が来た。腹壁が絞られていき、我慢できなくなつて玉江は小便を堪えているように腰を左右に振る。前傾姿勢を支えていた両腕の関節が、がくんと外れたようになった。

脱力感に襲われ、そのまま前のめりに湯の中に顔を突っ込んでしまった。腰は完全に崩れていた。

何か、悪いことでもしてしまったかのように、圭吾が茫然自失の態でそんな玉江の乱れぶりを眺めていた。

ちようど、後ろ向き玉江の白い双丘が眼の前に突き出されていた。前脚を折つた動物を思わせる。黒い毛飾りに隈どられた女の性器が露呈されていた。湯は太腿の上部あたりまでである。

自分が穿つた肉の穴が行為の痕跡を下辺に残していた。白濁した射出液がゆつくりとこぼれ落ちてきた。白い内腿を伝い、湯面に白濁した体液が浮いた。圭吾は、心の内から燃え上つて来る力の存在を感じた。一種の征服欲ともいえるものだった。

女は彼に射たれてうつ伏せていた。

一ノ瀬圭吾の前にひざまずいた女だった。

白い射出液は自らが放つたものなのに、女の体内から奔流して来る赤い血のようにも思えた。

初めて男と女の一体感のすばらしさを知った。

もう、眼球の震えのことも忘れていた。

この日から、二人は愛欲の日々に溺れていった。

圭吾は玉江の性の玩具に甘んじてはいたが、日々が、甘美な時となつた。暗い廃坑の中にも、そして山奥の湯泉の神秘の地にも、誰れ一人、踏み込んで来なかつた。またたき二人の「愛の世界」だった。

ただ、ただ、めくるめく愛欲の凄まじさのみを知った。

もはや、自身が脱走兵であることも、一ノ瀬圭吾は忘れていた。

